
RAIN・GIRL

桜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAIN・GIRL

【Nコード】

N6963Y

【作者名】

桜音

【あらすじ】

—もう何も失いたくない。だったら…もう、何も持たなければいい。

そんな考えしかできなくなってしまった少女が、関わるはずもなかった「レイン・ガール」という異名なあだ名の付いた、不思議な少女と出会う。そして、レインガールのある”事情”を知ってしまう少女は、ある戦いへと巻き込まれていく…。

この物語は主人公の話から入り、レインガールちゃんと深く関わるまでが長く、本編に入るまで時間がかかりますが、気長に読んでく

ださると嬉しいです！

失ツタ過去―01（前書き）

こんにちは！桜音です！！

小説はあまり読まないのですが
友達の影響で始めてみました！

まだ言葉の引き出しも少なく
漢字や言葉の使い方が間違っているところがあるかもしれませんが
見つけてくださった場合、教えて頂けると嬉しいです！！
では、よろしく願いします！！

失ツタ過去―01

…どうして？

わたしのまえに、おとうさんがねている。

しろいかみをかぶってねてる。

たたみのおへやで、きょうはおじさんもおばさんも、みんなみんなきて、みんなですわっておとうさんをみてる。

へんなの。

みんなないてる。

みんな、みんな。

どうしてみんな、ないてるの？

「おとうさん、なんでおきないの？」

何が起こっているのか、まだわからない少女が言った。

「お父さんはね……お父さんは……もう……起きないんだよ……」

少女の母親は、泣きながら震えた声で少女に教えた。

「何言ってるの？おかあさん？」

現実を知らない少女がそのようなことを言ってもしょうがない。

その言葉によって、周りの大人達もまた、泣き始めたことも、少女

は知らない。

―十数年後。

少女は、高校生になっていた。

「やばい！寝坊した！」

いつも起きる30分後に起きてしまった。

…急げば間に合う？

少女はベッドから飛び起きて、制服に着替える。

少女の学校では、7月の中旬である今、夏服の制服を着ることになっている。

その夏服のシャツのボタンをしめていくとあることに気づく。

「うわあ！ボタンずれてる！かけ直し！もう！」

寝坊した少女は、焦っているため、ボタンをかけ間違えたことに苛立ったが、2回目はすんなりいき、少し落ち着いてスカートをはく。

「よし！！」

少女は急いで歯を磨いて顔を洗って髪をとかしてパンをくわえて

「いってひはふ！！！」

と、いつものように言った。

「いってらっしやい」という声はしない家のドアを開けて、閉め慣れたように鍵を閉めた。

慌てアパートの3階から1階まで階段を駆け降りる。

「あっ！忘れものー！！」

慌ててアパートの階段を1階から3階まで駆け昇る。
開きなれた鍵をまた開けて、家の中を走り、くしゃっ！と机の上にあつたメモを取り、スカートのポケットにつっこむ。

家にあつた時計をちらつと見ると、登校時間20分前を切っていた。学校までは、電車で15分乗って、普通は15分歩かなくては行かないのだが……

「全力疾走!!」

少女は鍵を閉めた瞬間、ものすごいスピードで走っていった。

途中で何人もの人にぶつかったのだが。

……

「はあ…はあ………」
ギリギリセーフ!!」

なんとか登校時間一分前に学校の昇降口に着いたところで、全力疾走していた少女は息を切らして歩き始めた。
よろよろとロッカー式の下駄箱に歩いていき、下駄箱を開けた。

「おいしょつと」

…ここまでは、良かったんだ。

…ここまでは…良かったんだろう。

下駄箱を開けて、上履きを出して、履き変えて、教室に向かって……

そう、そうなるはずだった。

そうなるはず。

「へ……………」

この学校に通い始めて数ヶ月が過ぎたが、見慣れたロッカーの中はそこになかった。

「何……………コレ……………」

確かに、それは少女のロッカーだった。名前もあつて。でもそんなことを確認する余裕なんか少女にはなかった。遅刻しそうなのに、少女はロッカーを開けたまま、しばらく停止していた。

……………目の前の現実を目に焼き付けながら。

失ツタ過去―02（前書き）

2話です！三人称から一人称へと変わります！

失ツタ過去―02

「やばい電車来たあー！ー！！」

私、大宮美咲は、ただいま遅刻寸前です！

「ドアが閉まります。ご注意ください。」

「え！？ま、待って、待ってくださいー！！」

プシュー………ボタン！

カタンカタン…

カタンカタン…

「はあ…はあ…」

…ぎ…ぎりぎりせふ！！

私は、ドアが閉まる瞬間にドアに飛びこんだおかげで、なんとか一命をとりとめた！

なんだか…周りの視線が少々気になるけど……

まあ…いっか！

乗れたんだし…結果オーライ

私は近くにあった手すりにつかまって、電車早くー！と、いつも通りのスピードで走る電車に、心の中で叫んでいた。

……その辺からはあまり覚えていない。

とにかく焦っていたから、気づけば学校に着いていた。

そして、無意識に、いつものように、習慣化された動作を行った。

そのときは、間に合って良かった！という感じで、ほっとしていた。

ロッカーを開けるまでは。

「へ……………」？」

ロッカーを開けたら、貼紙があった。

「死ね」

…赤いペンで雑に、紙いっばいに大きくかかれたその字は、私の中に深く鋭く突き刺さった。

「死ね」

…手が、ロッカーにかけた手が、停止した。

「何……コレ……」

しばらく、何が起こったのかわからなかった。

何が起こったのかわかりたくなかった。

キンコンカンコン……

そのとき、登校完了時刻を告げるチャイムは、いつものように校舎中に鳴り響いた。

私はやっと、はつとして、ロッカーのフタにかけたまま停止していた手を離した。

「……ど……どうしよう……」

と……とりあえず上履き……」

声が震えてるのが自分でもわかった。

貼紙をそつと左手でよけて、右手で上履きを取ろうとした。

「ない！？え！？」

嘘でしょ？

…上履きが、片方しかない。

忘れたんじゃない。

片方だけなんて。

間違えられたわけじゃない。

片方だけないなんて。

「イ

ジ

メ

ゾクッ！！！！

その3文字が頭を過ぎった瞬間、
目を逸らしていた現実がわかった。

何が起こっているのかわかった。

「嘘だ、嘘だ………！」

バンバンバン！

と、鉄製のロッカーの中を手で掻き回す。

― ない…………… 取られた？

バンバンバンバン！

― 誰に？

バンバンバンバン！！

― なんで？

バンバンバンバン！！！！

― 私なんかした？バンバンバンバン！！！！！

― なんで私なの……………？

バンバンバンバンバンバンバンバンバン！！！！！！

ナンデワタシガ

イジメラレナクチャ

イケナイノ？

バンツ……………！！

「大宮さん！？」

はっとして聞き慣れた声の方を向く。
担任の川萩先生だ。

「もう席に着く時間じゃない！早く……」

川萩先生の声が途切れた。

私がおかしいってわかったんだと思う。

「どうしたの……？」

川萩先生が近づいてくる。

——やばい………見られたら………！

ボタン！！

私は勢いよくロッカーを閉めた。

川萩先生は驚いた顔をした。

私の両手は、見られてはいけないと、ロッカーを抑えつけている。

「あ……あの……上履き忘れちゃって……」

閉じられたロッカーを見ながらそう言ったのだが、

「あら……そうなの……？なら、あとで先生が上履き借りてきてあげるから、とりあえず教室に行きなさい。」

川萩先生は返答してくれた。

「はい……」

そのままロッカーを見ながらそう言った。

そのあと、川萩先生を見たのは、川萩先生が振り返って歩いて行ったときの後ろ姿だ。

――教室……。行くのが怖い。

階段を上ったら曲がってすぐの私の教室に、いつもより早く着いた気がした。

先に伸びる廊下には誰もいない。

みんな着席してるんだ。

――開けるのが怖い……

ドアに手をかけたところで、またもや停止してしまった。

「大宮さん！？」

――川萩先生……！

職員室に寄ってから教室に来た川萩先生に見つかってしまった。

私の不自然な姿に疑問を持たれたと思い、思わずガラッ！！とドアを開けた。

開けてしまった。

シン……とした教室の中、下をうつむきながらいつもの机へと向かい、机にバックを置き、椅子に座る。

そこまでの短い時間が長く感じた。

下をうつむいていたけど、確実な視線を感じた。

電車の中とはわけがちがう。

私、いつも遅刻しないし、
上履き…履いてないし……

椅子に座っても、下をうつむいたままだった。

現実を、見たくない。

でも、耳に入ってきたのは、
今起こっていることを決定づけるような、私を嘲笑う声だった。

…朝の挨拶は一応立った。健康観察も一応返事をした。バックの中から教科書などを取り出してバックをロッカーに入れて、それから
……

教室から逃げた。

失ツタ過去―02（後書き）

2話はすぐ更新できましたが、3話以降、間が空いてしまいかも
れません……
すみません！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6963y/>

RAIN・GIRL

2011年11月21日11時53分発行